

↑最近、自力で歩けるようになってきた初孫の優香ちゃん。その成長と「べこの会」の活動がゆかりさんの生きがいになっています。



**拭えぬ絶望感と喪失感  
どん底から救われた一言**

気丈に葬儀を済ませ、骨壺を抱え家へと帰ったゆかりさん。「二つ並んだ歯ブラシを見た時にもう一人なんだと絶望し、生きる意味も見失ってしまいました」。大きな喪失感から、寝られず、食べられずの日々が続き、体重が急激に5kg以上も減少。そんな姿を心配した友人の誘いで出かけた先で、ゆかりさんは自身と同様に配偶者である妻を亡くした池田弘道さん(赤池)と出会います。「きつかったやろ」。池田さんの心こもる一言で、内に溜め込



↑一人娘の杏梨さんの結婚式が予定されていた平成31年3月まで命がもたないと宣告されていた孝洋さん。ゆかりさんは愛娘の花嫁姿を一目見せたいとサプライズを企画。10月3日、新郎の辰島健一さんと一緒に晴れ姿で病室を訪問すると孝洋さんは大号泣。孝洋さんは「幸せにしてやってくれ」と娘の将来を力強く健一さんに託しました。

**悲しみの先に新たな道  
心で生きる亡夫と歩む**

「愛する人との死別で苦しむ大勢の人は一人で抱え込もうとする。同じ経験をしたからこそできる支援をしたい」と考えたゆかりさん。池田さんと共同で今年7月に遺族に寄り添うグリーンケア「べこの会」を設立しました。立ち上がったばかりですが「べこの会」の取り組みをSNSなどで知った遺族が県外からも来訪。配偶者や親、子どもなど大切な人を失った悩みを相談・共有する場として理解が広がりつつあります。「生きがいは、べこの会の活動と孫の成長」と微笑むゆかりさん。「二度とはない貴重な毎日を感じ謝しながら大切に生きる。夫が最期に教えてくれたことを胸に、これからの人生を楽しみます」。新たに生きる意味を見いだしたゆかりさんは、心の中で生き続ける最愛の夫と一緒に、第一の人生へ大きな一歩を踏み出しました。



べこの会初のレクリエーションとなった10月20日の「コーヒー焙煎会」。

【彩雲先生と楽しく書道を学ぶレクリエーションから始めませんか】  
**全集中!筆の呼吸で新年カレンダー作り**

- 日時 **12月13日** 日 / 14時開始
- 場所 豊徳会「すみれ館」(赤池409-3)
- 費用 無料 (\*カンパをお願いしています)
- 予約 **12月10日** まで電話で受付中 ☎ 090-1367-1637 (べこの会)

▶ グリーンケア「べこの会」は、毎週月曜日9時~16時の間「すみれ館」で相談会を開催中。予約・詳細は、上記☎まで。

愛する人を失った痛みにも少しでも寄り添うことができれば――

**近** しい人との死別で心身に異常を起す「悲嘆IIグリーフ」から立ち直るための支援を指すグリーンケア。日本では、平成17年の「福知山線脱線事故」を機にその存在と必要性が広がりました。しかし、全国的に相談できる場所は少なく、その多くが対象者を限定する団体がほとんどです。福岡県内にも、いくつかのグリーンケア団体がありますが、その数は少なく、私が妻を亡くした当初は、グリーンケアを受けに熊本県まで行っていました。

その痛みをひとりで抱え込まないで

## グリーンケア「べこの会」

誰しも一度は経験する人を失う痛み。寄り添う団体が福岡県内であれば、私やべこちゃん(松野さん)のあだ名)のように悲しみを抱えた地域のかたを支えられると思い「べこの会」を立ち上げました。心の痛みを分かち合える場所がこの町にあります。一人で抱え込まず、私たちに相談ください。

グリーンケア「べこの会」  
池田弘道 会長



## 愛する人の死を 乗り越えるために

大切な人との死に直面し、悲嘆に暮れるかたの支援活動(グリーンケア)を始めた松野ゆかりさん。かつては自らも絶望の淵にいた二人でした。ほんの少しの寄り添いや痛みを共有が人生を後押ししてくれることを知ったゆかりさんの人生の一歩に迫ります。

◎ グリーンケア / 「べこの会」副会長・松野ゆかりさん



↑部屋中を彩る家族写真。奥の写真ボードは夫が病室に飾っていた思い出。

心の整理もつかないまま最愛の夫との闘病と別れ

「人格がよく、見た目は怖いけど、同僚にも慕われ、家では一人娘をこよなく愛する強くて優しい夫でした」と思い出の写真に目を細める松野ゆかりさん(神崎)。夫・孝洋さんと娘・杏梨さんの3人で過ごした日々を「生活は裕福ではなかったけど、笑いの絶えない毎日だった」と振り返ります。

娘の杏梨さんも成人し、これから夫婦水入らずの時間を過ごすとしていた3年前の平成30年3月末、孝洋さんが床を這うほどの体調不良を訴えました。翌日、病院で告げられた病名は「急性骨髄性白血病」。その言葉に無言のままうつぶいた孝洋さん。初めて見せた弱い姿にゆかりさんは「今こそ私が支える時、絶対不安にさせないと決めた」と力を込めます。入院後、抗がん剤投薬による厳しい治療が続けられましたが、同年9月末に肺炎を併発。「いつ亡くなってもおかしくない」との宣告後も、妻と娘の献身的な支えで生きる意志をもち続け、病魔と戦い抜いた孝洋さん。同年11月3日、愛する家族に見守られながら静かに息を引き取りました。

My Treasure 私の宝物  
交通祈願のキーホルダー



ゆかりさんがトラック運転手の孝洋さんへ贈った物。肌身離さず持っていた大切な夫の形見。